

ルドルフ・シュタイナー

ゲーテの自然科学論序説 ~ 並びに、精神科学 (人智学) の基礎 ~

Einleitung zu Goethes Naturwissenschaftlichen Schriften

Zugleich eine Grundlegung der Geisteswissenschaft (Anthroposophie)

(GA1)

第4章

ゲーテの有機形態論に関する著作の本質と重要性

佐々木義之訳

ラバターの「人相学についての随想」が出版されたのは1775年から1778年にかけてでした。ゲーテはその発行責任ゲーテの形態論に関する著作の重要性は、それらが有機的な自然を探求するための理論的な基礎と方法論を確立したということにあります。それは「第一級の科学的業績」です。この事実を正しく評価するためには、私たちはとりわけ無機的な現象と有機的な現象の間の途方もない違いを考慮しなければなりません。例えば、2個のビリヤードのボールが衝突するのは無機的な現象です。もし、1個のボールが静止しており、もう1個がある方向からある速度をもってそれに衝突するならば、静止していた方はある方向にある速度をもって動き始めるでしょう。私たちはそのような現象を、ただ感覚に直接与えられるものを概念に変容させるだけで、「理解する」ことができます。私たちは、感覚知覚可能なもので私たちが概念的に把握しなかったものが何もない限りにおいて、それを行うことができます。私たちは1個のボールが別のボールに近づいて衝突し、その別のボールが動き出すのを見ます。私たちがこの現象を「理解した」と言えるのは、最初のボールの質量、方向、速度と第2のボールの質量から第2のボールの速度と方向を予測できるとき、言い換えれば、この現象が与えられた条件下で「必然的に」起こるのを見るときです。けれども、このことは、私たちの感覚に自らを現すものは、私たちがアイデアとして仮定するところのもの「必然的な結果」として現れなければならない、ということの意味しているに過ぎません。もし、そうであるならば、概念と現象は一致する、とすることができます。「同時に現象ではないような概念は何もなく、同時に概念の中になような現象は何もありません。」

無機的な自然の中での必然的な生起へと導くような条件についてもう少し詳しく考察してみましょう。私たちはここで、無機的な自然における感覚的に知覚可能な生起を決定づける条件は感覚の世界にも属している、という重要な事実に出会います。先ほどの例で言えば、質量、速度、そして方向—実際に「感覚」の領域に属する条件—が考察の対象となります。他のいかなる条件もその現象を規定しません。感覚にとって直接知覚可能な要素のみが「お互いにお互いを」決定づけるのです。ですから、そのような生起の概念的な理解は、単に目に見える現実から目に見える現実を演繹するに過ぎません。空間的、時間的要素—質量、重量、あるいは、光や熱のような感覚的に知覚可能な力—は、すべて同じ範疇に属する現象を引き起こします。物体は暖められ、それによって膨張しますが、原因と結果、つまり、加熱と膨張の両方が感覚の世界に属しています。

ですから、私たちはそのような生起を把握するために感覚の世界を超えて行く必要はありません。その世界の「内部で」、ある現象を別の現象から演繹しさえすればよいのです。こうして、私たちがそのような現象を説明し、概念的に理解したいのであれば、感覚によって「知覚され」得るあれらの要素だけを含めればよいのです。私たちが理解しようと欲するものはすべて知覚され得るのです。そこにあるのは、知覚されたも

の(外観)と概念との一致です。そのような出来事の中に、私たちにとって摸としたままのものは何もありません。こうして、私たちは無機的な世界の本質的な性質を引き出しましたが、そうすることの中で、私たちは、どの程度それを「それ自体を通して」、それを超えて行くことなく、説明することができるかを示しました。人類はそのような事柄の性質について最初に考え始めたわけですから、このことに関していかなる疑問もありませんでした。もちろん、彼らは概念と知覚されたものとの一致へと導く上記の判断過程をいつも辿ったわけではなく、お示したような彼ら自身の本質的な性質を通して、現象を説明することを決してためらいませんでした。(R. シュタイナーによる注: 哲学者の中には、私たちは感覚世界の現象をその根源的な要素〔力〕にまで辿ることができるけれども、だからといって、私たちが生命の本質的な性質について説明することができる以上にこれらを説明できるわけではない、と主張する人たちがいます。このことに関して言えば、これらの要素は「単純」である一つまり、それらはそれら自体がより単純な要素からは構成され得ない—ということを強調しておく必要があります。とはいえ、それらの単純さの中では、それらを導き出すことができない、つまり、それらを説明することができないということの理由は、私たちの認識能力の限界によるものではなく、それらがそれら自体に依存しているという事実によるものです。つまり、それらはそれらの全くの直接性において私たちの前に示される、それらはそれら自体で完結している、そして、それらはいかなる他のものからも導き出されることができない、ということです。)

けれども、それは「有機的な領域における」現象に関しては、「ゲートに至るまでは、」正しいことではありませんでした。有機体の感覚知覚可能な側面—その形、大きさ、色、温度、等々—は、同じ種類の要素によって決定されているようには見えません。例えば、植物の根の大きさ、形、位置、等々が、葉や花の感覚知覚可能な特徴を決定している、とすることはできないでしょう。もし、そうであるならば、そのような物体は有機体ではなく、機械であるはずで、むしろ、生きた存在の感覚知覚可能な特徴は、無機的な自然とは異なり、その他の感覚知覚可能な条件の結果として現れることはない、ということが認められなければなりません。(R. シュタイナーによる注: 有機体と機械の差はここにあります。機械においては、その部品の相互作用だけが本質的なことなのです。その相互作用を支配する統合的な原則はその対象自体の中に存在しているのではなく、それを組み立てた人の頭脳の中にある計画として、その外にあるのです。機械においては、その部品の相互作用を支配する決定的な原則は外的〔そして、抽象的〕なものであるのに対して、有機体においては、それはその対象自体の中で現実的な存在性を帯びているという事実こそが、正に有機体と機械との間の相違点であるということ否定できるのは、最も近視眼的な見方によってだけです。こうして、有機体の感覚知覚可能な状態は、単にひとつのものが別のものに続いて生じるように現れているのではなく、感覚には知覚不可能な内的な原則によって支配されているのです。その意味で、この原則は、組み立てる人の頭脳の中であって、心にとってのみ存在している計画以上に、感覚にとって知覚不可能なのです。本質的には、それはそのような計画なのですが、違いは、それが有機体の内的な存在の中に入り込んでおり、第三者、すなわち組み立てる人を介して作用するのではなく、直接それに作用するという点です。) 実際、知覚に関連した特質が有機体の中に生じるのは、「もはや感覚にとって知覚不可能な」何かによってなのです。それらは感覚知覚可能なプロセスの上に浮遊する、より高次の統一性の結果として現れます。それは根の形が茎の形を決定づけ、茎の形が葉の形を決定づけ、等々というようなものではありません。そうではなく、これらの形はすべて、それらの上方に存在する何か、感覚によってはその形に近づくことができないような何かによって決定されているのです。知覚可能な要素はお互いにとって存在していますが、お互いの結果として存在しているわけではありません。それらはお互いによって決定されているのではなく、何か別のものによって決定されているのです。ここで私たちが私たちの感覚をもって知覚するものは、他の感覚に関する要素へと還元することはできません。つまり、私たちは物事についての私たちの概念に感覚の世界には所属しない要素を含めなければなりません。「私たちは感覚の世界を越えて行かなければならないのです。」現象を理解しようとするならば、私たちが知覚するものだけでは不十分です。私たちは「統合する原則」を概念的に把握しな

ければならないのです。とはいえ、その結果として、知覚されたものと概念との間には距離が生じ、もはやそれらは一致しないように見えます。つまり、概念は観察されたものの上に浮遊し、それらがどのように関連しているのかを理解するのが困難になるのです。無機的な自然においては、概念と感覚的な現実のひとつのものですが、ここではそれらは分岐し、実際、ふたつの異なる世界に属しているように見えます。知覚されるもの、自らを感覚に直接提示するものが、それ自身の中にそれ自身の説明あるいはその本質をもはや担っていないように見えるのです。その物は自己説明的であるように見えませんが、それはその概念が何かそれ以外のものから取られているからです。その物は感覚にとっては存在しているにもかかわらず、感覚的な世界の法則には支配されていないように見えることから、私たちはあたかも自然の中の解決できない矛盾に遭遇しているかのようです。それはまるで自己説明的な無機的な現象と有機的な存在との間に深淵が横たわっているかのようで、後者においては、自然法則が何者かの侵害を受け、正当な法則が突然打ち破られているかのように見えるのです。実際、科学の世界では、「ゲーテによって」このミステリーが解決されるまで、この深淵は当然のことと考えられていました。それまでは、無機的な自然だけがそれ自身を通して説明可能であり、人間の知識に対する能力は有機的な自然の段階で終わると信じられていたのです。

近代哲学の偉大な改革者「カント」が、その古い間違っただけの概念を共有していたばかりではなく、何故、人間の心が有機的な実体を決して説明することができないかということについての科学的な「理由」を探究しさえしたことを考えると、ゲーテが達成したことがどれほどのことだったのかを理解することができます。確かに、彼は先験的な知性が有機的な存在と無機的な領域の両方において、概念と感覚的な現実との間の関係を把握することができる可能性を実際に認めていました。しかし、彼は人間がそのような知性を有する可能性を否定していたのです。カントによると、人間の知性は事物の統一性や概念を把握できるけれども、ただ、それはその各部分の相互作用から生じるものとして、抽象的な論理立てを通して達成されるところの分析的に一般化されたものとして把握できるだけであって、各部分が明確で具体的な(合成的な)統一性の結果として一すなわち、先験的な概念の結果として - 生じる、というような仕方では把握するのではないのです。したがって、彼は人間の知性が有機的な性質、そして、その活動は全体から各部分へと放射しているように見えるべきなのですが、そのような性質を説明することは不可能であると考えていました。カントは言います。

したがって、私たちの知性は、私たちの判断力に関して、奇妙な特質を有している。つまり、知性による認識においては、個別のものは普遍的なものによっては決定されず、したがって、それだけから導くことはできないという特質を。(「判断力批判」段落 77)

この記述にしたがえば、有機的な実体を探究するときの私たちは、総体(それは単に思考することができるだけです)についての考えと時空の中で私たちの感覚に現れるものとの間の必然的な関係を知る可能性を放棄しなければならない、ということになります。カントによれば、私たちはそのような関係が存在することを知らずして満足しなければならない、私たちは、そのような一般的な思考あるいはアイデアが「いかにして」そこから一歩踏み出し、感覚的な現実として現われるのかを知ろうとする私たちの論理的な思考を満足させることはできない、ということになるでしょう。私たちは、そのかわり、誰かがいるアイデアにしたがって何らかの合成物—機械のようなものですが - を組み立てるときのように、概念にとっても感覚的な現実にとっても外的な影響によってそのようなものが生じさせられた後、何ら仲介されることなく対峙する、と考へざるを得なくなるのです。こうして、有機的な世界を説明する可能性が否定された—実際、その不可能性が証明された - ように見えました。

ゲーテが有機的な科学に没頭し始めた頃の状況とはこのようなものでした。とはいえ、彼がこれらの研究に就いたのは、繰り返しスピノザの哲学を読むという最も適切な準備を行った後だったのです。ゲーテが最初にスピノザを取り上げたのは 1774 年の春でした。彼は「詩と真実」の中で、この哲学者との最初の出会

いについて次のように書いています。「私の非情な存在を教育するための方法について世界中を探し回った後、私はついにこの男の『倫理』に出会った。」

その同じ年の夏に、ゲーテはフリッツ・ジャコビに出会いました。当時、彼(ジャコビ)は(スピノザの教えに関する彼の1785年の手紙が示すように)スピノザを研究していました。ジャコビこそがゲーテをその哲学者の本質へとより深く導いた人物だったのです。当時、彼らはスピノザについて大いに議論したのですが、それは、ゲーテにとって「まだすべてが発酵し、泡立ちながら、何らかの最初の影響を及ぼし、そして、またその影響を受けていた」からです。

ほどなく、彼は、彼の父の蔵書の中に、ある本を見つけたのですが、それはスピノザに対して悪意に満ちた攻撃をしかけ、実際、彼を完全に戯画化するほどにまで歪曲していた著者によるものでした。ゲーテはこの深い思索家を再び真剣に研究することでそれに応えました。彼はスピノザの著作の中に、当時彼が尋ねることができた最も深い科学的な疑問に対する鍵を見出したのです。1784年に、詩人はフォン・シュタイン夫人とともにスピノザを読んだのですが、11月4日に、彼女に宛てて「私はラテン語でスピノザを持ち歩いています、ラテン語ではすべてがずっと明確なのです」と書いています。その哲学者は途方もない影響をゲーテに及ぼしたのですが、彼(ゲーテ)はいつでもその事実を全く率直に認めていました。1816年に、彼はゼルター宛てに、「シェークスピアとスピノザを除けば、亡くなった魂たちの中で、私に(リンネほど)大きな影響を与えた者を知らない」と書いています。ですから、彼はシェークスピアとスピノザの二人を、彼に最も大きな影響を与えた人物とみなしていたのです。

彼がその「イタリア紀行」の中でラバターについて書かざるを得なかった点について考えてみると、その影響がいかにか彼の形態論的な研究において現われているかを最も明確に見て取ることができます。ラバターは、生きた有機体はそれ自体の本性の中には本来存在しない影響を通して一つまり、普遍的な自然法則の侵害を通して一生じることができだけである、という当時流布していた観点を主張していました。ゲーテは次のように書いています。

最近、私は、チューリッヒの予言者による嘆かわしくも使徒的で僧侶的な御託宣の中に、次のような愚かな言葉を見つけました。「すべての生あるものは、それ自身の外にある何かを生き通している。」それは少なくともこのように聞こえました。さて、これは正にそのような異教の宣教師が書きそうなことであって、どんな守護神も彼がそうするには彼の裾を引き寄せたりはしないでしょう。
(「イタリア紀行」1787年10月5日)

これはスピノザの精神そのものです。スピノザは三種類の知識を区別します。第一の知識は私たちが一定の言葉を聞いたり読んだりするときに生じます。私たちが言及されていることがらを思い出し、それについての心的な像、私たちがものごとを自分で思い描くとき一般に用いるような像を形成します。第二の種類の知識において、私たちは、ものごとの特徴に関して十分に形成された私たちの心的な像から一般的な概念を創り出します。第三の種類の知識において、私たちは、神の何らかの属性に関する実際の特徴についての十分なイメージから、ものごとの本質的な特質についての十分な知識へと前進します。さて、スピノザはこの種の知識を *scientia intuitiva*、あるいは「見ることにおける知識」と呼んでいます。ゲーテが追及したのはこの最高の種類の知識でした。

スピノザが、ものごとはその本質において何らかの神の属性が認識されるような仕方では知らなければならない、と言ったとき、彼が何を意味していたのかを明確にしておきましょう。スピノザのいう神とは世界の思考内容一駆り立て、すべてを支え、すべてを保持する原則でした。さて、私たちはこの原則を独立した存在、限りある世界から独立し、自立した存在、限りある存在たちから離れている一方、それらを支配し、活気づける存在であると仮定することによって思い描くことができます。他方、私たちはこの存在について、

限りある世界に入ってきたものとして、もはや現世的なものの上方や傍らにいたのではなく、それらの「内部に」存在しているものとして考えることができます。この観点は決してあの太古の原則を否定しているのではなく、それを完全に認めています。ただ、その原則が世界の中に「注ぎ出されて」いると見ているのです。最初の観点は有限の世界を無限の世界の顕現として見ますが、この無限性はそれ自身の存在の中にとどまり、自分自身からは何も譲渡しません。それは決してそれ自身を越えて行くことはなく、それが顕現する前の状態にとどまります。第二の観点もまた有限の世界を無限の世界の顕現として見ます。しかし、この観点はこの無限の存在がその顕現を通して完全にそれ自身を越えて行った、それ自身の存在と生命をその創造の中に据え、今や、「その創造の中にのみ」存在していると考えます。さて、明らかに、知識とはものごとの本質を知覚することであり、その本質はそれが限りある存在として、あらゆるものごとの根本的な原則に関与する程度においてのみ存在しているわけですから、知るということは、ものごとの中の無限なるもの (R. シュタイナーによる注：つまり、それらの中にある一定の神の属性) を知覚する、ということの意味をしています。

既に記述してきましたが、実際、ゲーテ以前には、無機的な自然はそれ自体を通して説明することができる—それはそれ自体の説明とそれ自体の本性をそれ自体の内に含んでいる—しかし、それは有機的な自然の場合には当てはまらない、と考えられていました。後者の場合、対象の中に現れる本質的な特質あるいは存在はその対象自体の内部に見出すことはできない、したがって、それはその対象の外側に存在する、と考えられていたのです。言い換えれば、有機的な自然は最初の観点にしたがって、無機的な自然は第二の観点にしたがって説明されました。

このように、スピノザは統合された知識の必然性を証明したのですが、彼は、この理論的な洞察を有機的な科学の様々な分化した専門分野の中で証明するには、あまりにも哲学者過ぎました。この仕事はゲーテのために残されたのですが、彼の確固としたスピノザの観点への支持は、引用された文章によってだけでなく、多くの他の文章によっても示されます。彼が書いた「詩と真実」の中に、「自然は永遠不変の法則にしたがって働く、それはあまりにも神聖であって、神自身でさえその中の何ものをも変えることはできない」(第16冊、第4部)。1811年に出版されたジャコビによる本(「神的な事物とその顕現について」)を引用しながら、ゲーテは次のように述べています。

非常に愛すべき友人による本が、自然は神を内に秘めている、という命題を発展させているのが分かったことは、私にとって非常な喜びであった。私の純粋で深淵な、そして、経験豊富で生来のものの考え方、とりわけ「私に自然の中に神を見、神の中に自然を見る」ということを教え、それによってこの私の全存在を基礎づけているものの考え方をもってすれば、そのような奇妙で、一面的に限定された主張によって、私が愛し、尊敬してきたところのこの人間として最も高貴な心から、いつまでも精神的に遠ざけられている、ということなどあってはいけないのではないか？

(R. シュタイナーによる注：「Tag- und Jahreshefte (1811)」)

ゲーテはその踏み出そうとしていた一歩が科学の将来に大きな影響を及ぼすことを十分に知っていました。彼は、無機的な自然と有機的な自然の間の境界を破壊することでスピノザの考えを推し進めることによって、科学の方向性を大きく変えようとしていることに気づいていたのです。そのことは彼の随筆「先験的な知覚による判断」の中で表明されています。彼は、人間の知性は有機体を説明することができないことを証明しようとしたカントの「判断力批判」における試みに言及した後、それに対する次のような反論を述べています。

ここで著者は神的な知性に言及しているように見えるのは確かです。しかし、もし、私たちが本当に道徳的な領域において一神、善、そして不死への信仰を通して一より高次の領域に上昇し、原初

の存在に近づこうとするのであれば、知的な領域においても、私たちは一絶えず創造する自然の考察を通して—私たちをその創造に精神的に参加する価値があるものとする—ことができるのではないのでしょうか？いずれにしても、私は元型的、典型的なものに向かって、最初は無意識に、そして、内的な衝動から、休むことなく突き進んで来て、それがいかに自然法則にしたがって展開するかを示すことにも成功してきましたから、今や、ケーニッヒスベルクの聖人その人がそう呼んだような「理性の冒険」へと大胆に乗り出すことを妨げるものは何もありません。

本質的なことは、無機的な自然の中でのできごと - つまり、何か感覚的な世界の中だけで生じるところのもの - は、同様に感覚的な世界の中だけで生じる過程が原因となって決定されている、ということです。原因となる過程が要素 m 、 d 、そして v (運動するビリヤード球の質量、方向、そして速度)、そして、結果となる過程が要素 m' 、 d' 、そして v' から構成されていると想像してみましょう。 m 、 d 、そして v が与えられるときにはいつでも、 m' 、 d' 、そして v' はそれらによって決定されるでしょう。原因と結果からなるこのできごと全体を理解するためには、それらの両方を含むひとつの概念によって、それを定式化しなければなりません。けれども、その種の概念はそのできごと自体の中には存在しておらず、それを決定づけることもありません。それは両方の過程をひとつの共通の表現の中に包含していますが、その原因となることも、それを決定づけることもありません。感覚世界の物体だけがお互いを決定づけるのです。要素 m 、 d 、そして v もまた外的な感覚にとって知覚可能ですが、この場合、概念は外的なできごとを要約するために働いているだけです。それは何かアイデアや概念としては現実的ではないけれども感覚にとっては現実的なものを「表現して」いるのです。それが表現するこの「何か」とは、感覚的な知覚対象です。無機的な自然についての知識は、感覚を通して外的な世界を理解し、概念を通してその相互作用を表現することができる可能性に基づいているのです。カントは「そのようにして」ものごとを知る可能性を、人間が近づくことができる唯一の種類の知識であると見なしていました。このような考え方を、カントは推論的と呼びました。私たちが知らうとする「もの」は外的な知覚であり、概念、あるいはひとつに結びつけるものは単なる手段なのです。

けれども、私たちが有機的な自然を理解しようするときには、カントによれば、私たちは理想的、概念的な側面を、何か別のものを表現したり、示唆したりすることによってその意味を借りてくるものとして把握することはできません。むしろ、私たちは「理想的な要素をそのようなものとして」把握しなければならないでしょう。それは、空間的 - 時間的な感覚の世界にではなく、それ自身に発するそれ自身の意味を含んでいなければならないでしょう。無機的な世界の場合に私たちの心が単に抽象的に思い描くところの統一性は、それ自身を「それ自身から」形成しながら、それ自身の上に構築しなければならないでしょう。それはそれ以外の対象からの影響によってではなく、それ自身の存在にしたがって形作られなければならないでしょう。カントによれば、人間は、自己形成し、自己顕現する実体を理解することからは排除されています。

そのような理解を達成するためには何が必要なのでしょう？ 私たちはある種の思考を必要としているのですが、それは外的な感覚知覚から導かれたのではない実質を考えに付与することができるような、つまり、感覚によって外的に知覚されたものを理解するだけではなく、感覚の世界から離れた純粋な考えを把握することもできるような思考です。感覚の世界から抽出されたのではなく、その内容がそれ自身から、そして、それ自身だけから発展するような概念を「先験的な概念」と呼ぶことができます。そして、そのような概念を理解することは「先験的な知識」と呼べるでしょう。これから導かれるものは明確です。「生きた有機体は先験的な概念を通してのみ理解できるのです。」ゲーテは実際に私たちがこのようにして知ることは可能であることを示しました。

無機的な世界はできごとを構成する個々の要素の相互作用、つまり、それらがお互いを相互に決定づけるその仕方によって支配されています。有機的な世界においては、それは当てはまりません。そこでは有機体を構成する個々のものが別のものを決定づけているのではなく、全体 (あるいはアイデア) がそれ自身から、

それ自身の存在と調和して、それらのものを決定づけているのです。この自らを決定づける実体に言及する場合、私たちはそれをゲーテの言葉にしたがって、「エンテレキー」と呼ぶことができます。ですから、エンテレキーとは自らを存在へと呼び込む力なのです。その結果現れるのは感覚的な存在なのですが、それらはこのエンテレキー的な原則によって決定づけられています。このことは、有機体は自己決定的であり、前提となる原則に従ってそれ自身からその特徴を生じさせるにもかかわらず、感覚知覚可能な現実性を有している、という明らかな矛盾を生じさせます。すなわち、有機体はその他の感覚世界の対象とは全く異なる仕方感覚知覚可能な現実性を達成します。その結果、それは不自然な仕方で見えるのです。

有機体は、他の物体と同様に、外的には、感覚世界の影響にさらされている、ということもまた理解できません。屋根から落ちるタイルは無機的な対象にも生き物にもぶつかる可能性があります。有機体は栄養やその他のものを取り込むことを通して外的な世界に関連づけられます。つまり、外的な世界の物理的な状況に影響されるのです。もちろん、このことが生じるのは、有機体が空間的・時間的な感覚世界の対象物である限りにおいてのみです。この外的世界の対象物・エンテレキー的な原則が外に向かって現れたもの・は、有機体の外的な表現です。ですから、それはそれ自身と完全に一致しているようには見えず、それ自身の本性に厳密に従っているようにも見えません。つまり、有機体はそれ自身の形成的な法則に従っているだけでなく、外的な世界の条件にも左右されているという理由から、そして、それはそれ自身を決定づけるエンテレキー的な法則に従っているだけでなく、それが依存している外的な要因にも影響されてそうになっているという理由から、それは決してそれ自身と調和しているようにも、それ自身の本性に厳密に従っているようにも見えないのです。

ここで人間理性が関係してくるのですが、それ自身の原則にのみ対応し、外的な世界の影響を無効にする有機体が展開するのは「アイデアの領域において」なのです。「そのようなものとしての」有機的なものとは関係のないあらゆる偶発的な影響は完全に抜け落ちます。有機体における純粋に有機的な側面に対応するこのアイデアは元型的な有機体であり、ゲーテが言うところの「型」なのです。

こうして、型というアイデアの卓越した有効性が明らかになります。それは単なる「知的な概念」ではなく、すべての有機体における真に有機的な側面であり、それがなければ有機体ではありえないような何かなのです。それは「あらゆる」有機体の中に現れるので、いかなる実際かつ個別の有機体よりもより現実的なものです。それはまた、「いかなる個々の特別な有機体よりも」より十全に、そして、より純粋に有機体の本質を表します。私たちが型についてのアイデアに至る道は、外的な現実から抽出され、その内部で活性化していない無機的なプロセスについての概念に至る道とは根本的に異なっています。他方、有機体についてのアイデアは、そのエンテレキーとして有機体内部で活発に活動しています - それは私たちの理性によって理解される形を取ったエンテレキーそのものの本質なのです。アイデアというのは経験の総体ではありません - それは経験を「生み出す」ものなのです。ゲーテはそのことを次のように表現しています。「概念とは経験の『総体』であり、アイデアとはその『結果』である - 概念を理解するためには知性が必要であり、アイデアを把握するためには理性が必要である。」この言葉はゲーテの元型的な有機体（元型的な植物あるいは動物）に帰せられるべき種類の現実性を説明するものです。このゲーテ的な方法論は明らかに有機的な世界の本質を理解するための唯一の方法です。

私たちは、無機的な領域においては、多様性に富むその現象はそれを説明する法則性と同じものではなく、何かその外側にあるものとしてのこの法則性を単に指し示しているにすぎない、という本質的な状況に気づかなければなりません。私たちが「知覚する」もの—外的な感覚を通して与えられる私たちの知識における物質的な要素—と「概念」—あるいは、私たちが知覚するものの必然性を認識するための形式的な手段—との関係は、それらがお互いをその対象物として必要としている、ということです。けれども、この関係は、概念が生きているのは経験されたできごとの個別のことがらの中ではなく、それらのことがらの相互関係の中にある、というようなものとなっています。この相互関係は、多様なものをひとつの統合された全体

へと結びつけており、与えられた個別のものに基づいていますが、「全体」(あるいは統一されたもの)としては、実際、具体的には現われてきません。この関係の中で、「個別のもの」だけが外的な存在性の中に一対象の中に一現れます。統一性あるいは概念が「そのようなものとして」現れるのは、現象の多様性を結びつけることをその使命とする私たちの知性の中においてのみです。つまり、概念は、現象の「総体」として、その多様性に関係づけられているのです。ここで私たちはひとつの二面性、私たちが「知覚する」多様な現象と私たちが「思考する」その統一性という二面性を扱っているのです。

有機的な自然においては、有機体の多様で個別のものは、そのように外的な相互関係を有していません。統一性は知覚されるものの中に現れます。それは多様性ととも存在するようになります。つまり、それらは同じものなのです。現象する総体(有機体)の個々のメンバーの間関係はひとつの現実となり、もはや私たちの知性の中にだけでなく、対象の中にも具体的に現われます。そして、そこでそれはそれ自身から多様性を生み出します。概念は単にその「外側」にある対象物を要約する要素としての役割を演じるだけでなく、完全にその対象物と一体になったのです。私たちの知覚対象はもはや私たちがそれを通して思考するところの概念ではありません。私たちは概念そのものをアイデアとして知覚するのです。

ですから、ゲーテは有機的な自然を把握する能力を「先見的な知覚による判断」と呼んだのです。説明するところのもの—私たちの知識の形式的な要素である概念—と説明されるところのもの—物質的な要素である知覚されたもの—が同じなのです。ですから、私たちがそれを通して有機的なものを理解するところのアイデアは、私たちがそれを通して無機的なものを説明するところの概念とは本質的に異なるものです。それは単に与えられた多様性をひとつの要約のようにして結びつけるのではなく、それ自身からそれ自身の内容を生じさせるのです。それは与えられたもの(経験)の「結果」であり、具体的な現れなのです。(編者による注:したがって、例えば、時計についての概念はその各部分を通して直接的に自らを表現するのではなく、それらの相互作用と目的を知的に理解することを通してのみ把握することができるものです。ここでは、その統一性、あるいは目的は、その各部分を通して、直接的に現れるのではないのです。有機体の場合にはそうではありません。例えば、動物の各器官の形成や、その振る舞いの各側面はその本質的な性質、あるいはアイデアの直接的な表現です。このアイデアは直接知覚され、賦活され、経験をを通して深化されます。この意味で、それは経験の「結果」なのです。) 私たちが、無機的な科学においては、「法則」(自然法則)について語り、事実を説明するためにそれらを用いるのに対して、有機的な科学においては、「型」を用いる、というのはそのためです。「法則」は、それが支配する知覚された多様性と同じものではなく、その上に立つものです。一方、型においては、理想と現実が一体化しており、多様性は全体の中のひとつの点、そして、その点は全体と同じものなのですが、その点から生じてくるものとして説明できるだけです。

ゲーテの探求における重要な側面は、無機的な科学と有機的な科学の間のこの関係を洞察していることです。ですから、(今日よく言われているように)、ゲーテの科学は、有機的なものを無機的な自然を決定づけるのに用いられるのと同じ原則(機械的、物理的な範疇と法則)へと還元することによってそれらを包括するところの統合された自然観を目標とする一元論を見通していたのだ、と言うのは間違いです。私たちはゲーテが一元論的な観点をどのように思い描いていたかを見てきました。有機的なものを説明する彼の方法は彼の無機的な領域に対するアプローチとは根本的に異なるものでした。彼はより高次の原則にかかわることで必ず機械論的な説明が厳密に拒絶されるのを見たいと思っていたのです。(R.シュタイナーによる注:「私たちは重要なことがらが部分の中に集められているのを見る。建築作品について考えてみれば、いかに多くのことがらが規則的あるいは不規則的な仕方でも寄り集まることを通して生じるかが分かる。したがって、原子論的な概念は非常に便利なものであり、有機的な生命が含まれる場合にも、それらを適用するのをためらわないのだ。何故なら、正にダイナミックな説明だけが可能な問題を脇にやるときにだけ、機械的な説明の仕方が再び時代の趨勢になるのだから。」[散文の中の韻]) 彼は有機的な現象の原因を無機的なものに求めようとしたキーザーとリンクを批判しています。

このゲーテについての間違っただ観点が生じてきたのは、有機的な自然を理解する可能性に関して、彼がカントに対して取った立場のためです。カントが、我々の知性は生きた有機体を説明することができないと主張するとき、それは、それらが機械的な法則によって規定されており、物理的あるいは機械的な分野に属するものとしてそれらを把握することはできないのだ、ということの意味しているではありません。カントによれば、それが不可能な理由は、正に我々の知性が説明できるのは物理的 - 機械的なものだけであり、有機体にとって本質的な存在はそのような性質のものでは「ない」という事実にあるのです。もし、それがそのようなものであったとすれば、知性は自分が得意の分野を通してそれを理解することができたことでしょう。もちろん、ゲーテは有機的な世界を機械的な観点から説明することによって、カントに反論しようとしていたわけではありません。彼の論点は、我々は有機的な世界の本質である創造的な活動におけるより高次の形態を把握する能力に欠けてはいないのだ、ということでした。

今お話したことを考えてみると、直ちに分かるのは、無機的な特質と有機的な特質との間には重要な違いがあるということです。無機的な自然においては、「いかなる」プロセスも別のプロセスの原因となる可能性があり、その別のプロセスもまたさらに別のプロセスの原因となる可能性があるわけですから、一連のできごととは決してそれ自体で完結するようには見えません。すべてが連続する相互作用に向けて開かれており、どの対象集団も他の集団の影響から自らを隔離することはできません。無機的なできごとの連鎖には始まりも終わりもありません。ひとつのできごとと次のできごとの間には偶然の関係があるだけです。石が地面に向けて落ちるとしたら、その影響はたまたまそれがぶつかるものの種類によります。有機体においては、状況は全く異なっています。そこでは統一性が主要な要因になります。自立したエンテレキーは多数の感覚知覚可能な発展型から構成されており、それらのうちのあるものは最初に、別のものは最後に来なければなりません。それらの間では、あるものの後に別の何かが続くということは、ただ一定の仕方では決まっています。理想的な統一性は、一定の空間的な関係性の中で、時間の経過にしたがって、一連の感覚知覚可能な器官を生み出します。それはある一定の明確に決められた仕方、自然の他の部分からそれ自身を切り離し、その様々の状態をそれ自身から生み出します。ですから、これらのことから、理想的な統一性から進み出てくる一連の状態の形成を追っていくことによってのみ把握することができます。言い換えれば、「有機体は、それが成ることにおいてのみ、つまり、その発達においてのみ把握することができるのです。」無機的な物体は完成され、固定されています - それは内的には非動的であり、外から動かすことができるだけです。有機体は決して同じところに留まりません。それは絶えず内から外へと自らを再構成し、変容し続けます。こうして、ゲーテは次のように述べています。

理性はその活動領域を成っているところのものの中に見出し、知性はそれを完成されたものの中に見出す。理性は、「何のために？」とわざわざ聞いたりしません。知性は、「どこから？」と問うことはありません。理性は発達しているものの中に喜びを見出し、知性はすべてをしっかりと把握することによってそれを利用しようとします・・・理性は生きているものだけを規定します。地理学の関心事である既に成っている世界は死んだ世界です。(詩と散文)

有機体は自然の中で主に二つの形態を取って私たちの前に現れます。ひとつは植物であり、もうひとつは動物ですが、それぞれ異なる仕方では現れます。植物は「現実の」内的生活が欠如している点で動物とは異なっています。動物においては、この内的生活は感覚、意図的な動き等々として現れます。植物はそのような魂的な原則を有していません。それはその外的な「形態」の発達を越えて行くことはありません。植物においては、エンテレキー的な原則がその形成的な活動をいわばある一点から展開するとき、それぞれの器官は共通の形成的な原則にしたがって形づくられるという事実を通して現れます。エンテレキーは個々の器官を形成する力として現れているのです。すべての器官はひとつの形成する型にしたがって形成され、「ひとつ

の」基本的な型がモディファイされたものとして現われます。つまり、それらはその器官の様々な発達段階における繰り返しです。植物を植物としているところの、ある「特別な形成力」がすべての器官の中で同じ仕方で働いているのですが、その意味で、あらゆる器官は他のすべての器官と、そしてその植物全体と「同じもの」なのです。ゲーテはそのことを次のように表現しています。

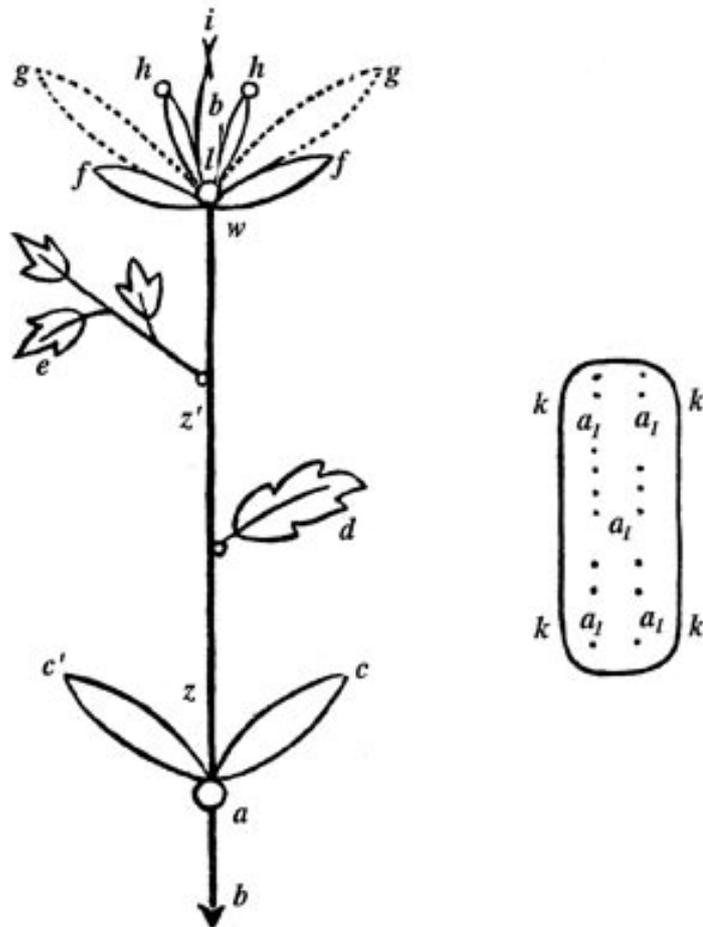
私は、私たちが通常葉と呼ぶところの植物の器官は、あらゆる形成の中に自らを隠し、そして現す真のプロテウスを隠し持っている、ということに気づきました。後ろにも前にも、植物はひたすら葉であり、未来の種子と不可分に結びついているために、一方を他方抜きで考えられないほどです。(イタリア紀行、1787年5月17日、1787年7月の報告に含まれる)

このように、植物は、ちょうど複雑なものがあまり複雑ではないものから成り立っているように、いわば多くの個別の植物から成り立っているように見えます。植物の発達過程は段階を経て進行し、その器官を形成します。各器官はすべての他の器官と形成的な原則において同一ですが、外観において異なっています。植物の内的な統一性は外に向かって広がっています。つまり、それは様々な形態において自らを表現するとともに自らを失うことで、(動物がそうするには)それ自身の具体的な存在性と一定の独立性を達成することがありません。そして、それは、生命の中心点として、その器官の多様性に出会い、それらを外界との仲介者として利用します。

私たちは今、それらの内的な原則の意味で、そうでなければ同一であったはずの植物器官の外的な差異は何によって生じさせられるのか?と問わなければなりません。どうして、「単一の」形成的な原則によって導かれている形成的な法則が、ある場合には葉を生じさせ、別の場合には萼を生じさせるのでしょうか?植物は完全に外的な領域に存在していますから、この差異は外的、空間的な要因に基づいているに違いありません。ゲーテは拡張と収縮の交替こそがそのような要素であると考えていました。植物のエンテレキー的な原則が一点から外に向かって働きながら外的な存在性へと入っていくとき、それは空間的な実体として現れます。形成的な力は空間中で活動し、一定の空間的な形をもった器官を創り出します。さて、これらの力は、収縮期においては、一点に向かって集中し、拡張期においては、展開しつつ、いわばお互いに離れようとして分散します。植物の一生を通して、三つの拡張期と三つの収縮期が交代します。この拡張と収縮の交代が、植物の本質的には同一の形成的な力が分化する原因となっているのです。

最初、植物のポテンシャルのすべては—一点へと収縮し—種子の中で眠っています(a)。次に、それは葉の形成という形で出現し、展開し、そして「拡張」します(c)。形成的な力はますますお互いに反発し合うようになるのですが、その結果、下部の葉はコンパクトで原初的なものとして現れ(cc')、上部では肋骨状でぎざぎざになります。そして、密集していたものすべてが分かかれ始めます(葉d、e)。以前は連続した間隔によって分離していた(zz')ものすべてが-萼の形成とともに(f)-茎上の一点へと引き寄せられることによって現れます(w)。これが第2の収縮です。花の花冠では、新たな展開あるいは「拡張」が生じます。萼片(f)に比べると花卉(g)はより洗練され、より繊細になっていますが、これは一点へと向かう収縮が弱まることにより、つまり、形成的な力の拡張がより強くなることにより生じることができるようになったものです。次の収縮は雄しべ(h)と雌しべ(i)という生殖器官の内部で生じます。そして、新たな拡張は果実(k)の形成の中で始まります。果実から現れる種子(a')の中では、植物の存在全体が再び一点へと濃縮されています。(R. シュタイナーによる注:果実は雌しべ下部[子房、l]の成長を通して発達します。つまり、それは雌しべにおける後半の段階ですから、単に別個のものとして描くことができます。果実の形成は植物における最終的な拡張です。その生命は今や、その環境から自らを閉ざす器官—果実と種子—の中で分化したものとなります。果実において、すべては兆候となりました。つまり、それは外見的な兆候に過ぎず、自らを生命から引き離して死せる産物となったのです。植物におけるすべての本質的な内的生命衝動は種子の中へと濃縮され、

そこから新しい植物が生じるのです。種子はほぼ完全なアイデアです。その外見は最小限のものへと還元されています。)



芽あるいは種子が展開あるいは実現したものが植物全体です。それらが十分に展開して植物を形成するために必要なのは正しい外的な影響だけです。芽と種子の違いは、種子はその基盤として地面を必要としているのに対して、芽は一般に植物上での植物の形成に相当しているということに過ぎません。種子はより高次の性質を有する個別の植物、いわば、植物形成における循環全体を表現しています。新芽によって、植物はその生命の新しいフェーズを開始します。つまり、それは自身を再生し、その力を濃縮して新たなものとするのです。したがって、芽の形成は植生のプロセスを中断することになります。生命を現出するための条件が欠けているときには、植物の生命は芽の中へと引き下がり、再び正しい条件が現れたときにはまた発芽させることができるのです。これが植生の成長が冬の間に中断する理由です。ゲーテはこのことについて次のように述べています。

極寒によって植生の成長が中断されないときには、それがいかに継続するかを観察することは非常に興味深いことです。ここ（イタリア）には芽というものがなく、芽とは何かを理解し始めています。（イタリア紀行、1786年12月2日）

ですから、私たちの気候条件では芽の中に隠されているものがそこでは露骨に現れているのです。実際、真の植物の生命はその中に隠されているのであって、ただそれが展開するための条件が欠けているだけなのです。

交代する拡張と収縮というゲーテの概念は特別に強力な反対に出会います。とはいえ、これらの攻撃のすべては誤解 - これらの概念に対する物理的な原因が見出されない限り、そして、植物の内的な法則がいかに

してその拡張と収縮の原因となっているかを示すことができない限り、それらは有効ではあり得ないという信念 - から出たものでした。しかし、それは馬の先に馬車をつなぐようなものです。拡張と収縮の原因として何も仮定することはできません - そうではなく、他のすべてがそれらから続いており、それら自身が段階を追って展開する変容の原因となっているのです。

そのような誤解は私たちが概念をそれ自身の先見的な形態において理解することに失敗し、それを外的なできごとの結果に違いないと主張するときにはいつでも生じます。私たちは拡張と収縮を原因としてではなく結果としてのみ考えることができます。ゲートは拡張と収縮を植物の中の無機的なプロセスの結果として生じるものと見なしてはおらず、むしろ、植物のエンテレキー的な原則が自身を形成する方法であると見なしていました。ですから、彼はそれらを感じ知覚可能なプロセスの総計から演繹されるものとして見ることができず、内的、統合的な原則そのものから生じてくるものとして見ざるを得なかったのです。

植物の生命はその新陳代謝によって維持されています。栄養を地面から吸収するところのより根に近い器官と、他の器官を通過してきた栄養を受け取る器官とでは、それらの新陳代謝に基本的な違いがあります。地面により近い器官はその無機的な環境に直接依存しているように見える一方、他の器官はそれに先立つ有機体の部分に依存しています。ですから、連続した各器官はそれに先立つ器官によっていわば特別に準備された栄養を受け取るのです。自然は、後から来るものが前に来たものの結果として現れるように、種子から果実へと段階を追って発達するのです。ゲートはこの段階的な発達を「精神的な階梯に沿った発達」として言及しています。彼の次のような言葉の中には、私たちが示してきた以上のものではありません。

上部の節はそれに先立つ節から生じ、それによって仲介される樹液を受け取るので、茎のより高いところにある節はその樹液をより洗練され、よりろ過された状態で受け取るに違いありません。そして、それは以前の葉の発達からの利益を享受し、その形態を洗練させ、さらに洗練された樹液をその葉や芽に送り込むのです。

私たちがこれらのことすべてを理解し始めるのは、それらをゲートのアイデアという光の下で見るときです。ここで提示されたアイデアとは、何らかの個別の植物において現れるような、そして、そこではその本来の形態においてではなく、外的な条件に適応した形で現れるのですが、そのような要素ではなく、元型的な植物の性質の中に、元型そのもののみに対応するような仕方で、横たわっているような要素です。

当然のことながら、動物の生においては、何か別のものが介入してきます。動物の生命は外的な特徴の中に自らを失うのではなく、むしろ、自らを分離し、その身体性をもって自らに仕え、その身体的な現れを単に道具としてのみ用いるのです。それはもはや単に内部から有機体を形成する能力として現れるのではなく、むしろ、それは有機体のそばにあるものとして、有機体の内部でそれを支配する力として活動しながら自らを表現します。動物はひとつの自己完結した世界として、あるいは、植物よりもはるかに高次の意味で、小宇宙として現れます。それはそのひとつひとつの器官によって仕えられるひとつの中心を有しているのです。

それぞれの口は上手に餌をくわえ、弱く歯のない顎であれ、恐ろしい歯を持つ強力な顎であれ、身体の必要に適ったものとなっている。いずれにしても、あるひとつの器官は他のすべての器官に供給するのに完全に適したものとなっている。それぞれの足もまた、長いものであれ、短いものであれ、大いなるスキルをもって、その生き物の衝動と必要に仕えるために動く。(「動物の変容」より)

植物の各器官は植物全体を包含していますが、生命の原則は、明確な中心点としては、どこにもありません。各器官の存在理由は、それらがすべて同一の法則にしたがって形成されているという事実の中にあります。動物においては、各器官はこの明確な中心点からやってくるように、つまり、その中心点がそれ自身の

性質にしたがってすべての器官を形成しているように見えます。こうして、動物の形態はその外的な存在性の基礎を与えるのですが、それは内部から決定されるのです。したがって、動物がどのように生きるかは、それらの同じ内的な形成原則によって方向づけられることになります。一方、動物の内的な生活は自由であり、それ自身の内部に限定されてはいません。つまり、それはある一定の限度内で外的な影響に適応することができるのですが、それは外的、機械的な影響によってではなく、型の内的な性質によって決定づけられます。言い換えれば、適応は有機体が外的世界の単なる産物として現れるようになる原因にまではなりません。その形成は一定の限度内に制限されているのです。

いかなる神もこれらの限度を超えることができない。何故なら、それらは自然によって尊重されているのだから。そのような限度を通してでなければ、決して完成に至ることはなかったのだ。
(「動物の変容」より)

もし、すべての動物が元型的な動物原則にのみ一致していたとしたら、すべて同じ動物となっていたことでしょう。ところが、動物の有機体は、それぞれがある一定の程度で発達する能力を有するところのいくつかの器官体系へと分化しているのですが、このことが異なる進化への基礎を与えているのです。理想的には、それらはすべて同じように重要とはいえ、ある器官体系が卓越し、有機体の形成力の蓄積全体を自らに引きつけるとともに、他の器官から引き離すということがあり得ます。そのような動物はその器官体系に向け、とりわけ発達したものとして現れる一方、別の動物は別の仕方発達することになるでしょう。これによって、元型的な有機体が現象世界に入っていくとき、様々な種や属として分化する可能性が生じるのです。

この分化の実際の(事実上の)原因はまだ述べられていません。外的な要素がその役割を果たすようになるのはここにおいてです - それは有機体はその外的な環境にしたがって自らを形成する「適応」と、卓越した条件に最もうまく適応した生き物だけが生き残るのを許す「生存競争」です。けれども、適応と生存競争は、もし、その形成原則が内的な統一性を維持しつつ多様な形態を取ることがなかったとしたら、有機体に対していかなる影響も及ぼさなかったでしょう。私たちは、この原則が、ひとつの無機的な実体によって別の実体が影響を受けるのと同じ仕方で、外的な形成力の影響を受けると想像するべきではありません。確かに外的な条件は元型がある特別な形態を取るという事実に対して責任がありますが、その形態自体は内的な原則から導かれるのであって、それらの外的な条件からではありません。形態について説明するとき、私たちはいつも外的な条件を考慮しなければなりません。形態自体が「それらの」結果として生じると考えるべきではないのです。ゲーテは、ちょうどある器官の形態を外的な目的という観点から説明する目的論的な原則を拒否したように、有機的な形態が環境の影響から単に因果律によって導かれるという考え方にも反対したことでしょう。

動物の器官体系はその外的な構造(例えば、その骨格)により関連しているのですが、私たちは植物の中に観察される法則がその中に一例えば、頭骨の骨格形成の中に一再び現れるのを見出します。ここでは、純粹に外的な形態の中に内的な法則性を見るゲーテの才能が特に明白なものとなっています。

ゲーテの観点に基づく植物と動物のこの違いは、植物と動物の間には明確な境界はないのではないかという疑念には確かな理由があるという最近の科学により発見された事実からすれば、不適切なもののように見えるかも知れません。ゲーテもまたそのような境界を打ち立てるのは不可能であることに気づいていたのですが、そのことによって植物と動物を明確に規定するのを妨げられることはありませんでした。それは彼の世界観全体に関係していました。ゲーテは、現象世界においては、定常的で固定されたものは一切なく、すべてが絶え間なく変動し、動いていると考えていたのです。けれども、私たちが概念において把握するところのものの「本質」は、変動する形態からではなく、それがそこにおいて観察され得るところのある種の「中間的な段階」から導かれることができます。ゲーテの世界観は、当然のことながら、一定の定義づけを行い

ますが、それにもかかわらず、私たちが特別な遷移状態にある形態を経験するときには、その定義が堅固に保持されることはありません。実際、ゲーテが自然の生命の柔軟性を見たのは、正にそこにおいてだったのです。

ここで記述されたアイデアによって、ゲーテは有機的な科学の理論的な基礎を据えました。彼は有機体の本質的な特質を見出したのですが、もし、私たちが元型(それ自身からそれ自身を形成する原則、エンテレキー)を何か別のものでも説明することができると思えば、この事実を容易に見逃してしまうことになります。しかし、そのような仮定は正当なものではありません。何故なら、元型は、先験的に理解されるならば、自己説明的なものだからです。それ自身にしたがってそれ自身を形成するこのエンテレキー的な原則を理解した人であれば誰であれ、これが生命の神秘に対する解答であることを理解するでしょう。他のいかなる解答も不可能です。何故なら、これがものごとの本質だからです。もし、ダーウィン主義が原初の有機体を仮定するように強られるならば、ゲーテはその原初の有機体の本質的な特質を見出したのだ、とすることができます。(R. シュタイナーによる注: 現代科学においては、原初の有機体という言葉は、通常、原始的な細胞(原始細胞)、有機的な進化における最も低次の段階にある単純な実体のことを指しています。ゲーテの意味では、「原初の、あるいは元型的な有機体」という言葉はそのことを指しているのではなく、本質的なもの(存在)、あるいは「原始細胞」を有機体にするところの形成的、エンテレキー的な原則のことを指しています。この原則は、最も単純な有機体にも、最も完成された有機体にも現れますが、これらは異なった発達段階にあります。それは動物の中の動物性であり、生きた存在を有機体にするところのものです。ダーウィンは初めからそれを仮定しています。それはそこにあり、導入されているのですが、そのとき彼は、それは環境の影響に対してあれこれの仕方ですら反応する、と言います。ダーウィンにとって、それは不定項Xだったのですが、ゲーテはその不定項Xを説明しようとしていました。)

種や属の単なる分類を打破して、有機体の真の本性に沿った有機的な科学の再生を始めたのはゲーテだったのです。ゲーテ以前の分類学者たちが、外的に存在する異なる種の数だけ(彼らはそれらの間を取り持つものを何ひとつ見つけることができませんでした)概念、あるいはアイデアを必要としていたのに対して、ゲーテは、すべての有機体はアイデアにおいて同一であり、外見的な違いがあるだけだと宣言したのです。そして、何故そうなのかを説明します。こうして、有機体の科学体系のための基礎が打ち立てられ、後はそれを洗練させるだけとなりました。どのような意味で、存在するすべての有機体はアイデアの顕現に過ぎないのか、そして、どのようにして、それらは個別のケースにおいてそれを現すのかということが示されるはずでした。この偉大な科学上の業績は、より深い教育を受けた科学者たちによって、広く認められることになりました。ダルトン弟(エドワード・ジョセフ)は、1827年7月6日、ゲーテに宛てて次のように書いています。

そのすばらしい見通しと、新しい観点を通して、植物学が完全なる変容を遂げたというだけでなく、骨相学の分野においてもまた、自然科学は多くの第一級の貢献を閣下に負っております。もし、その閣下に、私が同封させていただいたページの中でお褒めの言葉をいただけるような努力を見ただけならば、これ以上の喜びはございません。

ネース・フォン・エーゼンベックは1820年6月24日に、

あなたの随筆「植物の変容を説明する試み」の中で、植物は自らについて私たちに初めて語りかけました。そして、まだ若かったころの私もまた、そのような美しい擬人化の中で、虜になってしまいました。

そして、最後にフォイクトは1831年6月6日に次のように書いています。

私は生き生きとした興味と謙虚な感謝をもって、変容についてのあなたの小作品を受け取りました。私はこの理論への当初からの参加者として加えられていることを感謝しています。動物の変容(古くから知られている昆虫の変容ではなく、脊柱から来る変容)が植物の変容に比べてより公平に扱われているのは奇妙なことです。盗作や乱用とは別に、そのような静かな認識は、動物の変容というものは「あまりリスクを含んでいない」と信じることから来るのかも知れません。と申しますのも、骨格系においては、個々の骨はいつでも同じであるのに対して、植物系においては、変容によって用語全体に、したがって、「種の同一性」に革命が起こる恐れがあるからです。これは弱い者にとっては脅威です。何故なら、彼らはそのようなことがどのような結果をもたらすかを分かっていないからです。

ここにはゲーテのアイデアに対する完全な理解が見られます。そこにある気づきとは、個別(の有機体)を見るためには新しい観点が必要であり、そのような観点だけが個別のものを探究する新しい科学的な体系のための基礎を与えることができる、ということです。自己形成する「元型」は、それが現れるとき、無限に多様な形態を取ることができます。種や属は実際に時空の中に生きているので、そのような形態は私たちの感覚による知覚の対象となります。私たちの心が統一性の中にある有機体の世界全体を理解するのは、一般的なアイデア—元型—を理解した程度に依拠してなのです。私たちが個別の現象形態の中で何らかの形を取るような元型を「見る」とき、それらは理解可能なものとなります。それらは段階や変容の過程を追って現れますが、その中で元型は自らを表現しているのです。ゲーテの洞察に基づく新しい体系的な科学の使命は、本質的には、これらの様々な段階を指し示すということなのです。

動物界と植物界の両方において、上昇する進化過程が卓越しています。つまり、有機体はその発達の度合いにしがって分化しています。どうしてそれが可能になっているのでしょうか？私たちは有機体の理想的な形態あるいは元型を、それが空間的、時間的な要素から成り立っているという事実によって特徴づけることができます。その結果、それは「感覚的/超感覚的」な形態としてゲーテの前に現われました。それはアイデアとして(先験的に)知覚することができる空間的-時間的な形態を含んでいるのです。それが現象世界に現れるとき、実際に感覚知覚可能な形態(今やそれは先験的に知覚されることはありません)は理想的な形態に完全に対応していることも、していないこともあるでしょう。つまり、元型は十全なる発達を遂げていることも、遂げていないこともあるのです。ある種の有機体が低次の状態にあるのは、彼らの現象形態が有機的な元型に十分に対応していないからです。